東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程美術専攻工芸研究領域（彫金）
石芮寧

有の断片、無の瞬間
―透し彫りによる形と影のジュエリー表現―
論文要旨

物事の存在には「有」だけでなく、「無」にも様々要素が内包し存在する。一般的に「有」は形があり、可視化できる存在であり、「無」は形がなく、実態が明確でない状態である。有があってこそ無があり、無があってこそ有があるという相対的な関係で構成され、有無の関係する空間を元にした発想を背景に、ジュエリー表現の可能性を見出す研究を展開した。

筆者が有と無という表現形式に至ったのは、美術を認知する過程から生まれた。幼少期、美術に最初に触れた記憶は、祖母から鋏を用いて、紙に美しい花や動物などの模様を切り取る中国の伝統的な切り絵細工である「剪紙」を習ったことに始まる。模様の部分を残すことを「陽刻」と言い、模様を切り取ることを「陰刻」と言う。その剪紙の残された部分と切り取られた部分である陰と陽の存在に、まず有無の関係性における美意識を感じた。切り取られたマイナス空間は何もない空白ではなく、そこに有を引き立てる意味や価値が含まれ、無の空間は想像の空間でもあり、無から有をより一層感じることができる。本研究作品において造形的効果として用いた透した文様は「有」と「無」のそれぞれの存在価値を体現するが、視覚的に認知できる「有」の要素より、形が存在しない「無」の要素に情緒的な意味を感じさせることとした。これらの経験を通じて金工技法における代表的な透し彫り技法によるジュエリー表現の研究を行った。

本論文は、「有の断片、無の瞬間」を制作テーマとして、光によって投影された影と空間との関係の中で、視覚において瞬間的な変化から生まれる美への思考に着目し、物質の存在と非存在をもとにし、有形と無形の造形的な融合により、筆者の思索や作品制作につ

いて論じる。本論文における「有の断片」とは、実在する物質的な形などの要素の部分を指し示している。具体的には、日常生活の観察から、様々な景色に投影される影の要素を抽出し、金属という実態に透し文様を施して象徴的な表現を行うことである。一方で「無の瞬間」とは作品自体の影と透した部分を指し、物質的な存在から解放された事柄を抽象的にした表現や幻想的な要素で表し、空間へ無限の拡がりを示唆する表現を行うことである。これらの断片と瞬間は存在する有形のものと視覚的に捉えにくい無の領域と融合させ、作品の中で物質があるかのように見えながらも、空間に溶け込みつつ、空間との関係性が一体となり存在していることを表している。

一般にジュエリーは貴金属を使用するが、金属材料においても新たな視点を持ち、彫金技法を用いた表現行為をもとに自身のアイデンティティーを通じて発見した美的価値と特徴を自らの心情と結び付け、ジュエリーの造形及び表面に施す装飾の可能性を見出した。以上の「有と無」、「形と影」という要素において人々の感情に訴える独自のジュエリー表現のあり方を研究することを目的としている。

本論文は、以下のように 3 章で構成される。

第一章「有と無の根元について」では、筆者の表現の元となる美意識における表現の意図と捉え方を述べる。第 1 節「有無相生―原点に戻る」では、有と無に関する老子の思想から派生した美学について解説し、自身のアイデンティティーについて述べる。第 2 節「装飾における有と無」では、幼少期に剪紙に触れた経験及び有と無の関係を具体化した中国の伝統建築における美意識が筆者の創作に与えた影響について述べる。第 3 節「自己表現における『有』と『無』」では、修士から博士課題までの制作について自己表現の有と無を説明し、日常の物や風景を観察する行為による影の存在を捉え、研究作品に用いている「影」の定義及び影をモチーフとする透かし文様の由来について述べている。

第二章「表現要素―素材、色、技法」では、筆者の過去の作品とコンテンポラリジュエリーへ自身の思考における、表現形式、技法、モチーフ、素材、色などの作品を構成する要素を考察している。第 1 節「鉄とジュエリー」では、作品で使用した鉄素材の特性、必要性、着色方法、鉄とジュエリーの関連について展開する。第 2 節「鉄の特質について研究」では、本研究テーマに用いる透し彫り技法の表現に必要な要件を満たしていることを確認し、鉄素材の特質に関する研究を述べている。第 3 節「鉄の着色」では、本研究における作品のモチーフとして影がもたらす視覚的な要素を再現するために、鉄の様々な着色方法を実験し、作品に最適な着色方法を探究する過程を述べている。第 4 節「ジュエリー

表現における透し彫り」では、自身の表現手法の基盤となる透し彫り技法について、その歴史的背景、使用する道具や技法の解説を述べる。また、この手法をジュエリー作品に応用した具体的な事例を取り上げ、現代アートとジュエリーに関する考察も加えることで、自身の作品表現の形式をより明確に示す節としている。

第三章「提出作品『有の断片、無の瞬間』」では、提出作品についての解説を中心に行う。作品の表現意図、構成要素、主題、素材、制作方法、制作過程、展示方法について示し、デザインの段階から完成に至るまでの流れを詳述している。第 1 節「作品の意図とデザイン形成の過程」では、影の要素が作品にどのように変遷をなしているが、その造形におけるインスピレーションの源とその抽出過程、影の要素と造形要素を融合するプロセス、さらに作品に用いた黒と白の表現について述べている。第 2 節「制作工程」では、作品の成型方法と着色方法における主要な手順について説明している。第 3 節「提出作品と展示方法」では、作品の展示方法が作品テーマとどのように結びつき、また影の「有」と「無」の美しさを最大限に表現するための考察について述べている。

最後の結論では、作品における「有」と「無」の表現の関係性について検証を行い、本論での研究成果を踏まえた上で、今後の創作活動の方向性や展望について述べている。金属素材や技術を活用することで、自身の世界観や感受性をさらに掘り下げ、独自の表現を確立しながら、新たな可能性を作品に生み出すことを目指している。これにより、素材と技術の融合を通じて、より深い芸術的価値や独創性を追求していきたいと考えている。